

評論 『竹取物語』 「髪上げ・裳着」 について

甲山 羊二

◇

①

髪上げとは、成人の年頃に成長した女子が、振り分けた状態で垂らしていた髪を結び上げ、それを後方に垂らすことよって、成人としての髪形に変える儀式のことをいう。一方で、裳着とは、同じく女子が成人になった証のひとつとして、最初に裳を身に着ける儀式のことをいう。ここでの裳は腰から下に着けた衣服のことをいう。

両方は、特に平安時代において、貴族社会の儀式として定着していた。なかでも髪上げについては、広く社会に取り入れられていたものとして理解することができる。

例えば、『伊勢物語』「筒井筒」では、幼馴染の男女が恋する筋が展開され、女子が男子に宛てた和歌で、

「髪上げ」が詞として登場する。この場合の女子は、貴族社会とは無縁の者であつて、このことによつても、「髪上ぐ」という行為が、平常での成人の儀式として定着していたことを示している。

これら儀式は、より有望な婚姻相手との接点を、周囲が熱望することの起点となり得た。家の継承や繁栄という思惑が見え隠れするのも、その特徴であつた訳である。

『竹取物語』においては、髪上げも裳着も、かぐや姫の結婚の道を拓くものとして、常に翁の主導で行われた。ただし、それについては、次のような疑問も生じてくる。

翁は貴族社会の者ではない。明らかにそれとは異なる身分の翁が、なぜ、かぐや姫に対して、貴族文化を踏襲する儀式を可能にしたのかという点である。「貴族身分の付与」という帝の御言葉に悦楽した翁が、既にこの時点で、それを想定できていたとは考えにくい。

では、経済事情はどうであろうか。記述では、翁の裕福さについて、それを見ることは十分に可能である。かぐや姫の「結婚」に係る翁の過度な期待は、かぐや

姫を貴族の女子と同様に扱うこととなる。それは求婚者に対する翁の敏感な反応へと繋がっていく。

髪上げと裳着を起点として、物語は翁の心情形態を露わにしていくな。特に、帝からの求婚は、翁にとつては、自らの社会的地位並びに経済基盤の確立、更には皇室との姻戚関係さえも手中にする可能性を伺わせる。これらは、当時の社会性を類推できる事柄である。

『竹取物語』において、髪上げと裳着は単なる通過儀礼ではなく、貴族社会への妬みと嫉みさえも浮き彫りにする。それでいて、そうした社会に対する憧れは、止むことがない。こうした二重の心情は、現代もなお日本人の心象として、あり続けているといえるだろう。



② 「竹取説話」の原型伝来について―『今昔物語集』本朝世俗部―
(野口元大氏説支持の根拠として)

説話集『今昔物語集』の「本朝世俗部、卷第三十一本朝付雑事第三十三」に収録されている「竹取説話」

こと「竹取の翁、見つけし女の児を養へる語(二)」なるものと、日本最古の物語とされる『竹取物語』との関連性について、野口元大氏は「竹取物語 新潮日本古典集成 第二六回 一九七九年発行版での解説「五『竹取物語』と竹取説話の伝来」において、次のような内容を記している。

それによると、『今昔物語集』にある「竹取説話」は、話型としてほとんど完全に『竹取物語』と一致するとし、文章についても、『竹取物語』の参照の形跡を認めるとしつつ、かぐや姫が求婚者に課した難題の数(『今昔物語集』収録の説話は三題)の問題、内容的に伝承説話に相応しく、優曇曇華の花を含んでいることにより、『竹取物語』の原型説話が、『今昔物語集』にて汲み上げられたものとして、その見解を示している。また、『今昔物語集』五 岩波 日本古典文学大系二六「頭注において、収録されている「竹取説話」が、竹取翁説話のひとつの古形を示すのではないかとの文言がある。これも類推するに、野口氏の示す根拠に、何らかの関係を見出すことができると考えられる。

そもそも、『竹取物語』については、成立時期が不明であり、更には作者も不詳とされる。一方、『今昔物語集』については、平安時代後期に成立したとみられ、

それ以前に、既に成立したと推測される『竹取物語』とは、成立時期において、それなりの開きがあるものと思われる。これらのことから、『竹取物語』の原型並びに伝来について、ひとつの見解のみを確固たる結論とするのは、やはり困難ではあるものの、野口氏の示す根拠を検討するにあたり、ここは氏の見解を支持するものとし、賛成の立場を取りたいと考える。

野口氏の見解の根拠の中で、特に注目するのは、『竹取物語』にある「優曇華の花」を取り上げている点である。これについては、求婚者への難題の内容に関連付けて検討すべきであろう。野口氏の示す根拠に従えば、『今昔物語集』での「竹取説話」には、難題の数が『竹取物語』の五つに比べて少ない。しかしながら、「優曇華の花」は、『今昔物語集』においての「竹取説話」でも、難題のひとつに取り上げられている。野口氏は、こうした点については、先に挙げた「新潮日本古典集成」にある語注において解釈している。

また、「國語と國文学 物語文学の諸問題 第三六巻 第四号」収録の長谷章久氏の「竹取物語の成立」では、「優曇華の花」について、『今昔物語集』以外の、「竹取説話」に係る伝承説話に、同様の花が取り上げられているとする。野口氏の頭注によれば、「優曇華の花」

は仏典上の植物であり、靈花とある。こうした彼岸花は、仏教思想を根底に置く『今昔物語集』では、相關的にも相応しいものとなる。また、「優曇華の花」を人間の欲の彼岸にあるものとして留置した編纂者の思惑も、ここで垣間見ることができらるだろう。

更に、『竹取物語』では、平安時代の貴族階級における「髪上げ」や「裳着」が、女性の成人儀式として取り上げられている。ただし、平安末期においては、既に「髪上げ」は、宮中での儀礼からは概ね除外されていたことから、『竹取物語』の成立は、平安前期を含めて、それ以前の、或いはそこに至るまでの期間において、既になされたと類推できる。また『今昔物語集』の成立を、平安後期と見据えるならば、その編纂者が「竹取説話」を、宗教的伝承説話として収録した可能性は、十分にあったものと見ることがができる。

※

〈参考文献〉

野口元大 校注『竹取物語 新潮日本古典集成 第二六回』（新潮社、一九七九年）

- 山田孝雄 山田忠雄 山田英雄 山田俊雄 校注『今昔物語集 五 岩波 日本古典文学大系二二六』(岩波書店、一九六五年)
- 室伏信介訳注『新版 竹取物語』(角川ソフィア文庫、二〇一八年)
- 石田讓二訳注『新版 伊勢物語』(角川ソフィア文庫、一九七九年)
- 藤本勝義「貴族社会の通過儀礼 袴着・元服・裳着」(山中裕・鈴木一雄編『平安時代の儀式と催事―平安時代の文学と生活―』至文堂、一九九四年)
- 長谷章介「竹取物語の成立」(東京大學國語國文学會時枝誠記代表編集『國語と國文学 物語文学の諸問題』至文堂、一九五八年)
- 山中裕 鈴木一雄『平安貴族の儀礼と歳時―平安時代の文学と生活―』(至文堂、一九九四年)
- 宮脇賢・石井正巳・小田勝『全訳古語辞典』(旺文社、二〇〇三年)